

想定外問答：なぜ道場稽古は、素足で行われるのか

昭和五〇年入学 稲賀 繁美

ホノルル空港出国審査場にて

それはハワイのホノルル空港での出来事、というほどでもない、他愛ない経験だった。近年、といっても、はや二十年以上、9・11以降のことだが、アメリカ合衆国への航空便の搭乗、あるいはそこからの出国に際しては、身体検査、持ち物検査のうちに、靴を脱がされる。ホノルルも例外ではなかった。空港で日本向けの搭乗手続きにかかったのは、東日本大震災の始まりから一月もたたない四月五日のこと。いまさらヤレヤレとも思わず、指示にしたがった。

ところが素足になってみると、敷き詰められた絨毯の感触が、武道場の畳に似てことのほか心地良く、足の裏がそれをむやみに喜んでいる。思わず出国審査場で、素足のまま踊り出したくなってしまった。思うにそれは、この一週間ほど、亜熱帯の氣候のなかで朝から晩まで、窮屈な革靴を履いておらねばなかつたからだろう。鬱血を催していた足は、素足になって体重を支えたことで、急に解放感を覚えたのか、とたんにはしゃぎ始めてしまったものらしい。

翻つてみると、日本では武術の稽古といえは、柔道や剣道も含め、素足で行う。それが当たり前だと思つているが、なぜそうするのか深く問うことは、あまりなされない。思うに、それは足の裏の感覚を磨く訓練だったのではないか。試しに靴を履いて居ればなんでもない、砂地や小石のある場所で、稽古というよりも、歩いてみることをお勧めしたい。最初のうちは、足の裏に直に激烈な刺激がやつてきて、とても普段靴を履いて地上を闊歩している時のようには歩めないことに気づくだろう。踏躑として一歩一歩、探るようにして足を進めなくては、とても立つておれない。そして日本ではまた素足で闊歩しても大丈夫な住宅街や田舎道があるけれど、大都市となると、日本であれ、韓国であれ、中国であれ、北米であれ南米であれ、はたまた欧州であれ、道路を素足で歩くなどというのは、無謀なまでに危険極まりない。ニューヨークはマンハッタンの舗装された歩道など、割れたガラスや金属の破片がどこに転がっているかわからないからである。経験者はご存知だろうが、足の裏に刺さったガラスを除くのはきわめて面倒だ。そしてうっかり釘など踏み抜こうものなら、放置すると破傷風に感染する恐れも高い。

道場という人工空間

ここまできると、うつつらと見えてくるだろう。掃き清められた道場とは、障害物を取り払った、きわめて特殊な実験環境であることが。板敷きの道場に

少しでも砂があがつていたり、小石が撒かれていたりすると、それだけで通常の稽古などまったく不可能となる。千葉周作の道場では、わざと小豆を撒いて鍛錬したというが、逆にいへば、それくらい恵まれた人工的な環境でなければ、通常の武術の稽古や、ましてや競技試合などは、ままならない。とすれば、ひとたび道場の外に出た実践には、道場では経験できない障害がいたるところに待ち受けていることになる。道場での剣術の稽古では、難なく出来ていたはずの足捌きも、土地がちよつと傾斜していたり、地面に凹凸があつたり、あるいはごくありふれた雑草の茎が首を擡げているところを踏みつけたりしただけで、もう狂つてしまい、使い物にならなくなる。屋外の果し合いで、砂の眼潰しを食らつて、剣豪があつてなく破れた、というのも、さもありなん話だろう。

靴に守られて歩くことは、こうした厄介から身体を遠ざける工夫である。素足では不可能な行動が、靴によって保護された足ならば可能になる。だがそれは、感覚の鈍磨を許すことにも繋がる。とすれば運動靴を履いた運動とは何なのか。それは筋肉運動の合目的性に合致した器具を装着することで、身体の弱点を覆い隠し、能力を容易に発揮させ、増幅させるための工夫ではある。だがそれは、感覚麻痺を代償にして得られた効率ではない。身体に補助器具を装着して成績を向上させ、記録を狙う競技スポーツは多い。また怪我を避けるために、防御の面や籠手を取り入れる工夫も、竹刀剣道では必須とされてきた。(砂の眼潰しが危ないとなれば、眼を保護するゴーグルを装着しておけばよい、という理窟だ)。それと比べると、古流武術の型稽古では、裸同然の、刃物を受けければ斬られてしまうか弱い身体を前提として、稽古が組み立てられていることに気づく。単純化するなら、西洋で発達した闘技は、金属の鎧を纏い、盾を手、金属の棍棒をふるつて、敵の肉体を鎧の金属ごと叩き潰すという荒業だ。それに対して、日本でも戦国の世こそ兜に鎧といういでたちがあつたにせよ、近世徳川の世になって以来の武術修行では、容易に損傷を蒙る身体を晒した、

いわば傷つきやすく、無防備な露出を前提とした稽古が励行されてきた。これは何を意味するのか。

軍備拡張の思想、「武」の思考

矛盾という言葉の原義が示すとおり、より強い矛を防ぐに足りる盾を備えるという相互強化は、出発点において自己撞着を抱えている。矛に盾という悪循環は、重装甲の直喩、ひいては軍備拡張の比喩だろう。だがこの「矛盾」に眼を瞑る志向が、近代以降の軍事力増強を支えてきた。そこを支配するのが、絶対的に優位な兵力を確保しようとする軍拡競争の原理であり、さらには軍事力の優位によって敵を威圧する、抑止力の議論であろう。防御されているからこそ無謀な腕力を発揮できる、という前提で発達した競技スポーツとは、根本的にこうした軍事技術の平和利用、あるいは軍事行動の平和的な擬態・擬制にすぎない。

そしてここまでくれば、こうした軍事技術とは根本的に異なった価値観を模索するのが、武術の嗜みであるらしいことが、仄かに見えてくる。傷つきやすい身体を取って攻撃に晒すのは、ほとんど自殺行為だろう。だがその危険を冒すことで、かえって心身は研ぎ澄まされる。分厚い装甲で守られ、積極的に感覚鈍磨を引き受けることで許される行為を、蛮行あるいは暴力と定義できるなら、矛を止めると書く「武」には、むしろ心身のセンサーの感知性能を高める訓練が含まれていることがわかる。真剣で行う型稽古が意味を持ち始めるのも、この次元だろう。間違つて真剣を浴びても大丈夫な兜や鎧といった安全装備を身にまとつたのではけつして見えてこない境地を体験し、そこから糧を得るのが、武術の稽古の意味だ、ということになる。それは端的にいえば、臨死体験を人工的に設定する技法といつてもよい。死を遠ざけるのではなく、死の間際まで接近することで、何が見えてくるのかを、生の側へと伝えるための精妙な

仕組みが、武術の稽古の一斑を担っている。

しかしそれは、えてして勘違いされるような、死の礼賛や、自殺幇助とは無縁だろう。いささか話題が飛躍するという印象を与えるかもしれないが、脳死判定が社会問題となつた頃のことを思い起こそう。日本と欧米という対比が許されるなら、そこでは大きな違いが観察された。欧米では医療現場のみならず一般大衆に至るまで、脳死患者の臓器をいかに活用するか、という生体移植の可能性への関心が、議論の中心となつた。ところがとりわけ日本では、はたして脳死は死か否か、と死の認定基準が、しきりと議論されたからである。いわば欧米では脳死問題は生への可能性として議論されたが、日本では、死をいかに受け入れるかが、社会の、そして宗教の問題として頻繁に論じられた。

その関連で神学的議論に一言だけ触れるならば、現在の正統キリスト教神学では、旧教側も新教側ともに、靈魂と肉体とを峻別する。人の死後、天国に行つた靈魂は、もはや地上で遺族の周囲に留まることはない。徘徊するのはそれこそ救済を拒絶された悪靈に他ならない。これには背後の基底文化として牧畜の伝統が密接に結びついており、現今の欧米世界では、靈の救済が保証されれば、肉体の解体処理と再利用を妨げはしない。だが日本のみならず東アジアの場合、たとえキリスト教徒であっても、親族の外科的な遺体解剖にはなお抵抗が強く、さらに祖先の靈が生者の周辺に不可視のままに居て、見守つてくれるとする実感が、根強く残つてきた。「迷信」と蔑まれ、「異端思想」として否定されたにもかかわらず、人々の個人的な心情としては、靈との日々の對話が、今なお広く生存者の心の支えとなつていることが、観察されている。

幽頭一如か、サイボーグか

そしてこれは、なにも日本列島にのみ限定すべきことではない。北方アジアからアリューシャン列島を経由して北米の先住民に至る文化圏では、かつては

シャーマニズムという用語で括られた祖先霊信仰が広く分布していた。また東南アジアでは幽霊映画が大人気だが、二〇一一年には、タイのアピチャッポン・ウィーラセタクン監督の『ブンミおじさんの森』がカンヌ映画祭で黄金の椰子賞を受賞した。ここにも描かれた祖先の霊との交流は、実は古代ゲルマン社会でも、英国や北米のニュー・イングランドでも、むしろ日常茶飯の話題だった。ドイツケンズの幽霊小説や、セーラムの魔女狩りを想起すればよいだろう。だがそれは、敢えていえば、その後伝播してきたキリスト教によって、教義上・神学上の理由から、なごらく執拗に抑圧されてきたものだった。

幽頭一如とは、出雲神道などでも唱えられる考えである。幽体となった祖先に思いを馳せ、それを現世(うつしみ)と一体にして連続したものの、あるいは表裏一体のものとして把握する思想には、個としての己はけつして個として孤立してこの世界に存在しているわけではない、という確信が裏打ちを与えているだろう。ここには、唯一の絶対神という、いわば抽象的な観念との対峙を基本とする信仰とは異質の「祖先神」観念が兆している。絶対神への信仰にあつては、神が到達不可能だからこそ、この絶対なる存在と自己を同一化させたいという欲望が、頭を擡げる。その延長上で、己が個体の弱さ、*vulnerability*を科学技術によって克服しようとするのが、サイボーグの思想であるが、それもまた、自らを神に匹敵する地位に引き上げたいとする高望みの、ひとつの顕れだろう。そしてサイボーグの思想が、臓器移植や科学技術による身体置換装置 *prosthesis* の開発と不可分な繋がりをもち、繰り返すまでもない。

機先を制する技術の虜(こゝ)

だが、武術は逆に、己が脆弱さを現実として引き受け、それを出発点として生を営む覚悟といつてよい。剣術の稽古、あるいは柔術の稽古とは、どうやら、軍拡競争の論理とは別の倫理的要請へと我々を誘っている。心身を偽りに糊塗

して甲殻機動隊よろしく武装するのではなく、むしろ心身を徹底的に武装解体し、余分をそぎ落とし、皮膚を晒したところに、武術の裸形、剣術の基本が見えてくる。殺傷術とは殺傷される技術でもある。だがそうだとすれば、今までの考察を下敷きにするかぎり、武術とは殺傷術の優劣の競い合いでは、ありえない。

剣術の修行における真剣の効能について、先にごく初歩的な知見を抽象的に述べた。柔術にあつてもまた、相手の手が鋭利な刃物であると想定すれば、対処の仕方^もは、現在の試合柔道などのような振る舞いは、とても無理だろう。対処の身のこなしは、おのずと異なったものとなる。接触せず^もに投げる呼吸投げをいかさまと貶すのは容易だが、刃物に刺されてから初めて敵の攻撃に気づくのでは、手遅れだろう。それ以前にまず、接近してきた相手が、攻撃を目的とした接触を意図しているならば、その相手の矛先を事前に察知するだけの能力は不可欠だろう。出方が分かっていた相手の動きをたくみに誘導すれば、つまり力づくで恣意的に抵抗するような気配を消して対処すれば、相手が自分の突進力で、一人芝居のまま墓穴を掘る、といった状況をつくりだすことは、さして難しいことではない。事は武術だけではなく、現実の社会における交渉ごとの遣り取りなどで、頻繁に観察されるところだ。

ここで「事前に察知する」というと、なにか超能力による予知のような誤解を招く。だが相手が敵意を抱いた段階で、すでに相手の動きが手に取るように悟られ、自分の体が(頭脳の判断よりも早く)それを先導するように自在に動くのでなければ、的確な対応など、ままなるまい。この場合、「対応」という言葉も不適切だろう。相手の行動に「対応」していたのでは、後手後手にまわってしまうからだ。実際には、そうとは見えぬまま、こちらが先手を取っている。

あるいは相手に先手を許すように見えながら、相手側が自ら選んだつもり「先手」によって相手に自己限定を強い、結果としてまんまと相手を自在に操っている。「打たせて勝つ」あるいは「後の先」とは、その秘訣を指した修辭法だろう。

相手が我知らずこちらの想定のとおりに動くということは、相手をすでにこちらの術中で手玉に取っていることになる。ここで「手」という言葉が頻出するが、実際に決め手となるのは、手という以上に、運足の秘訣である。剣の場合の「手のうち」にも似て、足の裏の感覚、足の指の能力を磨くことが大切となる。そこに素足の稽古の意味もある。

「想定外」への対応術としての「武」

ここまでくれば、ルールという人工的かつ限定的な規則のなかで、「安全」な競技場という枠組みに守られ、「想定内」の敵対関係において勝利を収めるといふ、競技スポーツの存在論的な限界も明白となるだろう。敵意を顕わにした相手に対峙し、あるいは先陣争いに付和雷同するのは、武術としては稚拙極まりない。対処療法としての「後手」は、ジリ貧に追い込まれる、愚かな選択だ。だが敵方を当方の術中に収め、それを承知のうえで、さらにことさら相手の敵意を挑発したり、相手が敵意を剥き出しにするのを放置したりするならば、どうだろう。それはもはや公平な駆け引きでも、ましてやフェアプレイでもない。なぜならそこには、相手を破壊してやろうという悪意が潜んでいたことになるからだ。

さらにそうした、こちら側の隠された悪意を、実は相手方が最初から計算に入れて状況を操作していた、といった、虚虚実実の闘ぎあいまでもが、水面下あるいは背後に同心円を描いて、秘かに隠されている場合も少なくない。決闘の場呼び出されて、首尾よく相手を倒したと思ったら、実はそれが畏であり、決闘を周囲から傍観していたはずの群衆から、突然に囲まれて、試合の勝者がおめおめと撲殺される。そんなどんでん返しは、なにも時代劇のなかだけの虚構ではない。「戦に勝って戦争に負ける」、という事態は、歴史を振り返っても、

枚挙に暇があるまい(1)。

ここにはいかなる教訓があるのだろうか。それは個々の「戦術」上の勝敗を越えた次元に、戦略的な配慮が要求される、ということだろう。試合という枠組みは、事態を事前の「想定内」で処理しているに過ぎない。だが現実はこの「試合」の枠組みの外に広がっている。言い換えれば、武術とは、こうした「試合」の限界を超えた事態への備えを練る訓練でなければなるまい。およそ「想定外」の事態の発現に対していかに対処するか。その訓練に、武術の武術たる面目があり、稽古はこの水準の追求に本来の提要を見出すべきだといえよう。

脆弱さの露呈としての武術修行

ここで、冒頭に触れた、道場での素足の稽古に戻ってみよう。無防備な素足を晒しながら、しかし掃き清められて平坦な畳や板の間という人工的な環境を利用する道場稽古は、よく考えると両立しがたいふたつの条件のもとでなされる。だが、このふたつの条件は、一方では無防備な心身にその弱さを気づかせつつ、他方ではそれを稽古という実験空間のなかで、いわば括弧に括って、その場限りでは保護してくれている。道場がいかに甘やかされた空間なのかを知りつつ、そこでしかできない実験を追求するのが、稽古の意味だろう。そしてそれは、稽古の空間というものの想定限界を常に自覚するための設定でもある。

とすればどうだろう。道場における裸足とは、「想定外」をあらかじめ稽古場に持ち込むための虚構だったとはいえないか。そして虚虚実実の裏読みの相乗、先の先を取ろうとする無限の嵩上げという悪循環には嵌まらない智慧を涵養するのが、稽古のめざすべきところではないだろうか。相手方に悪意の発生する危険を未然に回避して、対立関係を解消し、状況を制御する。そのために必要な感官を養い、それに耐える心身を鍛錬する。その秘訣が、道場に素足を晒すという、一見卑近な約束事の内にも、秘かに準備されていたようだ。

3・11という「想定外」の震災に直面した日本社会にも、あらためて「素

足の稽古」が求められているように思われる。

二〇一一年四月二十八日*

註

(一) 四方田大彦『怪奇映画天国アジア』白水社、二〇〇九年。

(二) 金森修『ゴレムの生命論』平凡社新書、二〇一〇年。

(三) ここでひとつハワイにまつわる逸話を思い出しておこう。周知の例だが、山本五十六発案の真珠湾攻撃は、世界最初の航空機動隊による奇襲であり、戦術的には画期的な成功だった。だが、この米国の「恥辱」infamy がローズベルト大統領の議会での演説に格好の材料を提供し、結果として米国民を自醒ませ、一致団結して戦争に立ち向かう意思を植えつける起爆剤となった。たしかにホノルルに配属されたばかりの太平洋艦隊は、罔の性格をも宿していたが、米国海軍側は、真珠湾での雷撃は無理とみて、ここまでの被害は想定していなかった。だが日本側は軍事的戦術においては圧倒的成功を収めたものの、米国の戦意を出鼻で挫くという目的とは裏腹の事態を招いた。たしかに開戦時点では、長引く「支那事変」(中華民国側にたてば、日本による侵略行為)に鬱積していた日本国民は、海軍の大戦果に溜飲を下げた。だが日米開戦は、資源輸出禁止という(日本側からみれば理不尽な)合衆国側の挑発にまんまと乗せられた最後通牒であり、ミッドウェー大敗後の時点からみれば、政治的には取り返しのつかない戦略的失策を自らに許したものの、との解釈も、あながち排除できないことになる。その評価は尺度の取り方によって様々だが、今日でも、実人生では、えてしてこの手の事態の錯綜に巻き込まれて、有為の人物が、回復不可能な痛手を負い、敗残の身となって表舞台から姿を消すことも、珍しい出来事ではない。付言すれば、真珠湾にあるアリゾナ号記念碑での、現時点での映画解説は、山本に対しては、きわめて肯定的かつ同情的である。日米開戦に

は最後まで反対しながら、指揮官として高度の作戦を立案し果断に実行に移した連合艦隊司令長官は、帝国日本海軍の滅亡を代価として、旧敵国の戦没者慰霊施設で、破格というべき死後の栄光を享受している。

1)

(*) なお、本稿を改変したものが、『かみはま合気道：三重大学合気道部OB会誌』にも掲載予定であることを、お断りする。

平成二十三年度
赤門合気道倶楽部 第五十二号

赤門合気道

平成二十三年七月二日 発行

編集者 赤門合気道倶楽部 広報委員会

東京大学運動会合気道部

発行者 赤門合気道倶楽部

印刷所 株式会社 東大教材出版